美　術　科

学びの深まりが自覚できる
美術の学習指導を目指して

～自ら課題を見つけ，探求する力を育む学習指導の工夫～

附属函館中学校　冨　尾　　拓

Ⅰ　はじめに

美術科において，自らの感性を働かせて思考・判断し，創意工夫しながら表現したり作品を鑑賞したりするという一連のプロセスを働かせる力を育成することが重視されている。さらに，生涯にわたって美術に親しみ，生活や社会に生かしたり豊かにしたりする態度の育成，感じ取ったことをもとに，自分の思いや考えを大切にしながら，自分なりの意味、新しい美，自分を発見するなどの鑑賞の学習，発達段階に応じて，我が国の文化等に関わる学習を通して，伝統の継承や創造への関心を高めるとともに，諸外国の文化のよさを理解することが求められている。

本美術科では，「学びの深まりが自覚できる美術の学習指導を目指して」と主題を設定し，１年目は「試行錯誤の跡を可視化する取組」という視点で研究実践を進めてきている。生徒一人ひとりの発想・構想における思考の跡や作品等の鑑賞を通じて深まった価値の広がりなどを可視化することを通じて，個々に応じた指導を目指し，生徒に学びの深まりを実感させていきたいと考えてきた。また，２年目は「思考・判断し，表現する力に関する評価の工夫」に重点を置き，生徒一人ひとりの学習評価を次の指導に生かしていくことで創造的な表現力を育てる指導の見直しと学習評価の工夫を図る取組を行ってきている。

これまでの実践を通じて感じてきた課題として，①適切な評価のためには「指導のねらい」を明確にした学習指導の工夫と形式的にならない評価基準の設定が必要であること，②さまざまな題材に活用できる知識や技能を定着させるための演習ワークシートの継続的な取組と視点を明確にした発想・構想のプロセスを可視化するワークシートの工夫・改善の必要性，③創造的な表現力を育てるため，生徒自身が自らの課題に気づき，主体的に学習活動を進められる探求過程の工夫と提案，が重要であることが見えてきた。

そこで本年度は，これまでの実践内容を継続しつつ，自らの課題に気づかせ，その課題解決における，生徒のこれまで身につけてきた知識・技能を活用した探求過程に焦点を置き，美術科における学びの深まりを実感させる取組を進めたい。

Ⅱ　研究の経過

「学びの深まりが自覚できる美術の学習指導を目指して」と主題を設定し２年が経過した。生徒の試行錯誤の跡を可視化させるためのワークシートの工夫や長期にわたるそれらの蓄積と振り返りを通して，生徒の変容を見取ることを目的として研究を進めてきている。いかに指導と評価の一体化を図り生徒の見えにくい学力を共有していくかを視点とした。

その中で，発達段階や学びのつながりを意識した年間指導計画の見直しを行った。三年間で生徒に身につけたい力をしっかりと定着させていくことを目標に，発達段階や，生徒の現状を考慮して学んだ知識や技術を活用しながら体験的に身につけていくカリキュラムを検討した。ここでは基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力，判断力　表現力等をバランスよく育てることを重視してきている。

また，ポートフォリオ形式の「制作のあしあと」作成のための思考のプロセスをたどるためのワークシートの開発では，鑑賞や表現の内容では抽象的な言葉を多用しやすく曖昧なものになりがちであるため，発想や構想したことを形や色彩で表すことを始め，言葉で説明や思いを補いながら進めることで，今まで漠然としていた思いや感情に自分自身が気づき理解していく過程を大切にした。また，表現に至ったその過程を可視化したものを他者が鑑賞し，さらに鑑賞者が評価し自分なりの解釈を補うことで相互の学びの深まりを実感させることができるワークシート作りを目指した。成果としては，①つながりを意識した年間指導計画の中に言語活動の充実を踏まえた学習活動を位置づけることで，これまで習得した知識や技能の活用と思考・判断し，表現する一連の過程を効果的に設定することができた。②可視化を目的としたワークシートの工夫は,試行錯誤の過程や思考の過程や変化が見取りやすくなり,問題意識を共有することに役立ち効果的な助言やアドバイス,適切な場面での評価が可能になった。また,生徒自身の学習の振り返りや知識・技能の活用に役立った。

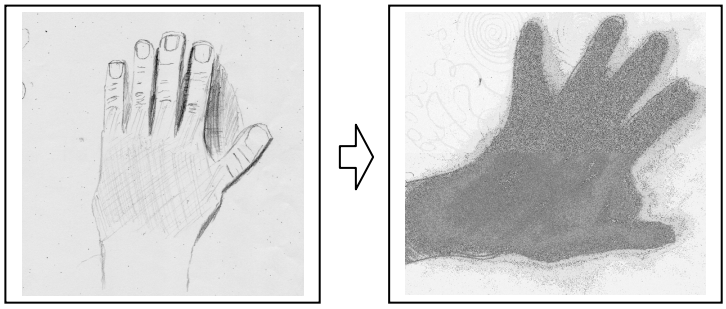


図１　生徒の表出された表現に演習と助言を行った例

Ⅲ　本年度の研究

１．研究の方向性

２１世紀型の学力について，本校では「社会を生き抜く力を備えた，未来への飛躍を実現できる人材としての資質や能力」と定義している。また社会を生き抜く力は，土台となる「感じる力」の上に「考える力」「発信する力」が重なり，下の力が上の力を支えるものとして考えられている。そこには情意面での確かな支えが「考える力」を安定させ，思考力，判断力，課題発見能力，問題解決能力，知識・技能の理解・習得を向上させるものと思われる。そうして培った力を発信していくことで自立・協働・創造を図るための能動的・主体的な力を身につけてさせることができるととらえた。

これをうけて美術科では「生き抜く力」を，「創造的な表現力」とおさえることとして，生涯にわたって美術に親しみ，生活や社会に生かしたり豊かにしたりする態度の育成という視点からのアプローチが重要であると考える。

そこで教科指導の中では生徒が自らの課題に気づき，その課題解決における，これまで身につけてきた知識・技能を活用した探求過程に焦点を置きながら，美術科における学びの深まりを実感させる取組を進めたい。よって今年度，副主題を「自ら課題を見つけ，探求する力を育む学習指導の工夫」とした。

２．教科研究仮説

【教科研究仮説】
習得すべき基礎的・基本的な知識や技能を明確にすることにより，生徒の表現や鑑賞活動において，思考力・判断力・表現力の向上がはかられ，主体的に自らの課題を追究するための力を育てることができる。

仮説の検証にあたっては，まず生徒の学習状況の把握と学習内容の習得状況を踏まえその変容を探る指針としたい。そこで，美術科における基礎的・基本的な知識や技能を明確に整理し，生徒と共有することが必要である。創造的な活動のために想像力とイメージ力の関係を明らかにし，演習等の学習活動を進めたい。そのためにこれまで蓄積してきたポートフォリオを主軸に考え，生徒の思考のプロセスをたどるためのワークシートの開発を行い，思考の過程をお互いに共有することで的確な指導と評価の一体化を図る学習活動の工夫を進める。また，授業形態の工夫を行い，言語活動の充実を図り，その活動から思考力・判断力を見取りたい。このように，基礎的・基本的な知識・技能の明確な提示と活用しやすいポートフォリオの作成により自ら課題発見し，課題解決のための追究を始めることができると考える。そして，生徒自身の思いが反映された造形活動のプロセスを体感させることで，豊かな創造活動で学びの深まりを実感させ，表現することの喜びを感じさせたい。

Ⅳ　研究仮説に基づく実践例

１．「立体マンダラ　［白い塔編］」

実践の概要は次のようなものである。本題材は，マンダラの要素（地・水・火・風・空）を利用した立体作品の共同制作を通して，統一や変化などの美の秩序や構成の基本を学び，部分と全体の関係や色彩や形を通じて自分の思いや考えを表出させることの面白さを体感させることをねらいとしている。立体マンダラをテーマとした共同制作はこれまでも取り組んできている。これまでの実践では各要素（地・水・火・風・空）を担当した生徒がそれぞれの要素をイメージした塔を形や色彩を工夫して制作し，最終的に共同で一つの作品にまとめ上げるといった内容である。ここ数年，年間指導計画に取り入れ２年生で制作している。

そこで今回行った「白い塔編」ではこれまで活用してきた色彩を「白」一色に制限することで追究の方向性を絞り込むことを試みた。

図２　色彩と形をもとに表現されたマンダラ

生徒は，色彩を制限されることで「形」をどのように扱い，マンダラの要素から受け取ったイメージをいかに創造し表現するかを期待した実践例である。これま

での実践をふり返ると「水」を担当した生徒から表現される作品は「青等の寒色系」を利用した作品が多くみられ，「火」を担当した生徒の作品からは「赤系の色彩」を利用するものがほとんどであった。色彩の効果は大きく一目で何の要素を制作したかが読み取れるものが多かった。そこで感じた課題は，色彩の効果に頼り，形態の表現は単純なものが多く見受けられたことである。そこで今回の実践では制作する対象の色彩を白と限定することで，これまで「色彩」に頼ってきた効果は「形」を追究する視点へと変わった。

要素の分析・他の要素との比較・素材・表現の工夫と課題を絞り込むことで，視点がはっきりと定まりより深い思考と試行錯誤を繰り返す様子が感じられた。

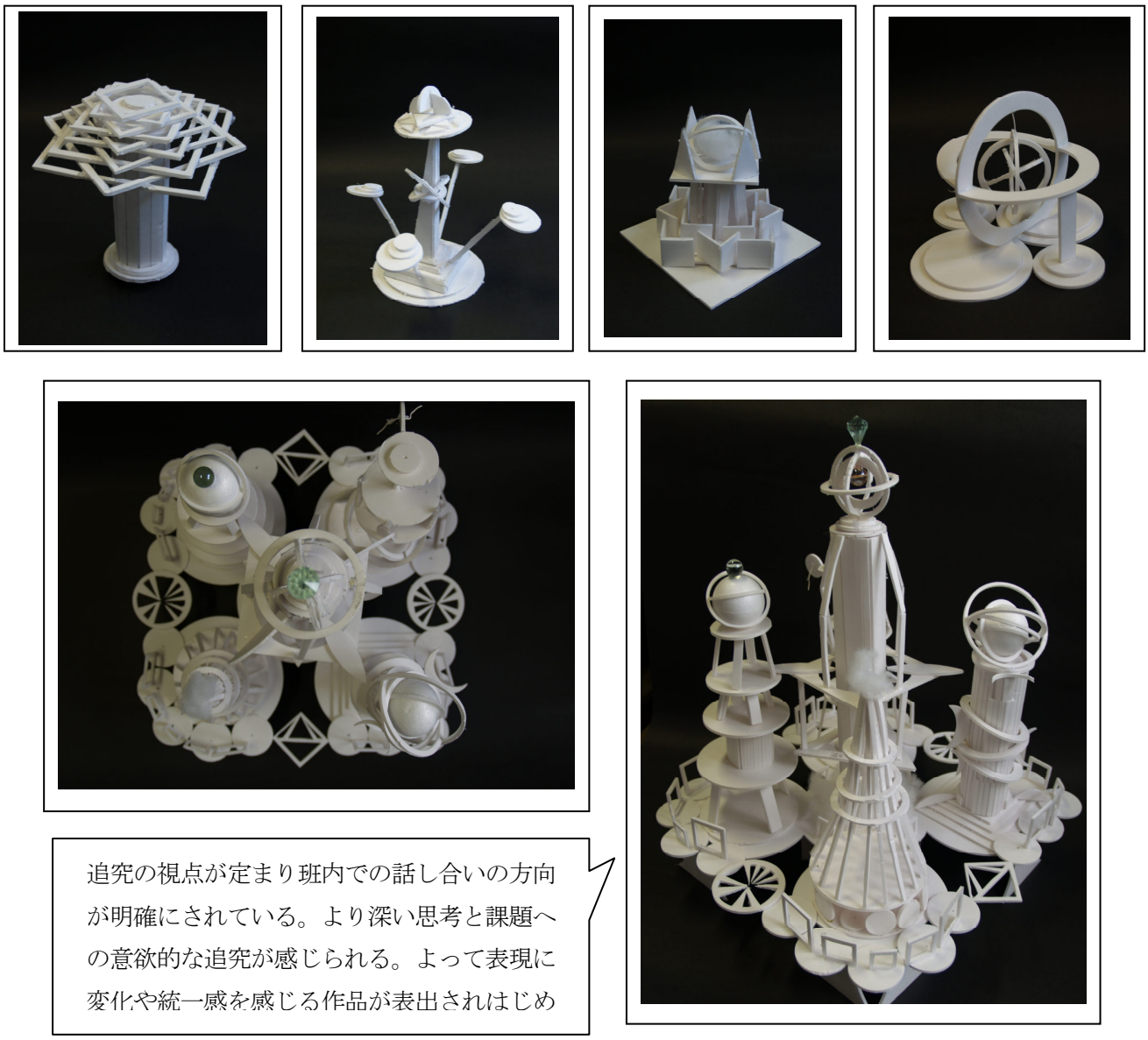


図３　色彩の制限により形への意識が高まった作品例

制作を終えた生徒の感想には次のような記述が見られた。

- 「地」というと全てをしっかりと支えているようなイメージなので，安定感を出すために板を重ねて太い筒状の柱を中心に据えました。まっすぐに伸びるイメージを大切に制作をしました。
- 要素が「地」ということなので，強く，頑丈なイメージを常に心がけて制作しました。土台となる部分を意識的に迷路状に構成することで安定感を出して地のイメージを強調しました。

●「水」という要素を担当したので，水の波紋やしずくの部分を取り入れてみました。全体として優しい感じにすることを大切にしてなめらかな線や曲線を意識して作りました。

●「水」という要素を制作してみて，水のゆったりと揺れ動く感じや多様な形に変化する循環のようなイメージを塔に詰め込みました。水の持つ安定感や存在感といった大きなどっしりした雰囲気と清涼な感じを大切にしました。

●「火」を表すために，「不安定」な感じを大切に進めました。柱の高さに高低をつけることで火が立ち昇る様子を表しました。土台はあえて円を重ね重量感を出し永遠に燃え続ける火を意識しました。

● 段々に，徐々にというテーマで広がる「炎」を表現しました。最終的に広がるというテーマを感じるようになりました。

●「風」をイメージして，あえて不安定な感じを強調しました。土台と塔は斜めに接合し不規則な柔らかな円形を取り入れることで揺れている表現を追究しました。

●「風」→目に見えない神秘性を意識しました。固定された形の中に風吹き抜けていくような動きも取り入れました。

●「空」なので広く壮大なイメージで制作しました。丸い円をいくつも重ねることで待機の重なりを表現したり，中心に１つ軸を作ることで安定感を表現しました。なめらかな曲線は柔らかな光。綿を利用して雲を意識させました。シンプルな形をいくつも組み合わせながらも統一感を出せるように注意しました。

２．定期試験での問題解決的な能力の見取り

１学期行われた学期末試験では，問題解決的な能力を問う問題「赤いひもと白いひもを持った手のデッサン」を出題した。第１学年では，４月より題材名「素描の基礎」の中で《手の表現》を既習している。また，《存在感のあるりんご》では鉛筆による明度，彩度の表現等を指導してきた。表したいことを絵で豊かに表現するためには，形や色彩などの効果を生かして発想や構想することが大切である。本問では，「これまでの知識や技能を活用し，テーマを自分なりに解釈し作品を描く」という課題を基に，形の特徴を生かす，的確な明度・彩度表現，主題と構図という視点から問題解決的な能力を見取ることを目的として出題した。

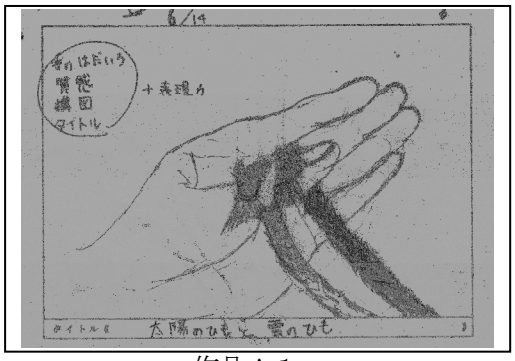
第１学年	問　題	赤いひもと白いひもを持った手を描きなさい。 解答用紙のわくの中に鉛筆でデッサンすること。 ※それぞれの特徴がよくわかるように工夫して描くこと。 ※ひもの長さ，材質，本数は自由とする。自分で想像したものを描くこと。 ※作品に描きたかった思いが伝わるようなタイトルをつけること。

＜評価規準＞　鉛筆の特性を生かし，対象の見方，とらえ方を工夫しながら自分の主題を表現している。

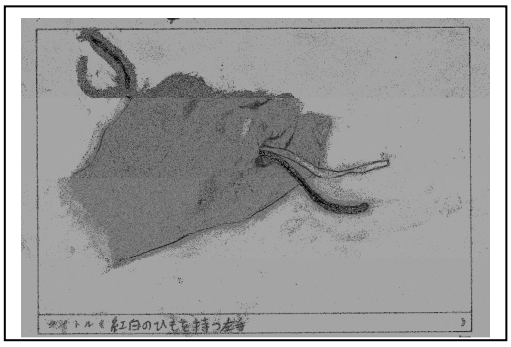
【指導事項】　素描の基礎　明度・彩度　構図の工夫

＜正答の条件＞

鉛筆の特性	線の強弱・濃淡，色の幅などを工夫し深みのある表現をしている。
形の特徴	質感，立体感などそれぞれ対象の特徴を比較し，稜線の扱い方や形や動きのとらえ方を工夫している。
明度･彩度表現	赤　白　肌色の表現を画面の上で自分なりに設定し，描いている。
主題と構図	構図から思い描いた主題が明確に読み取れること。



作品Ａ１



作品Ｂ１

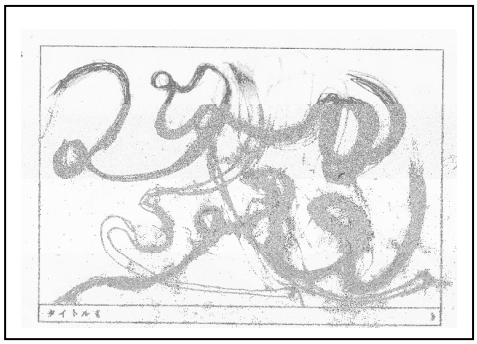
図４　定期試験における生徒の解答作品例

実施後の分析から各条件の通過率は７０％を超えるものとなった。既習内容を自分なりに解釈し，活用させながら表現された作品が多く見られた。（図４）しかし，ここで感じたことは，各条件をそれぞれ通過した作品であっても作品から受ける印象が表面的であったり，表現意図と技術がうまくかみ合っていない違和感を感じる作品が多く見受けられたということである。

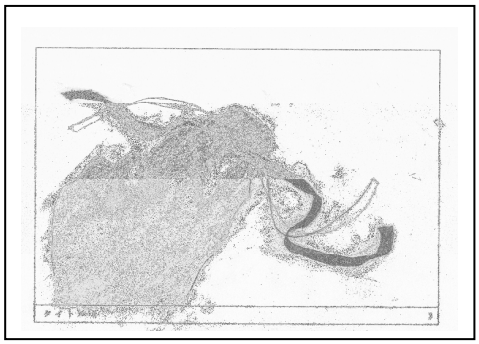
そこで，同テーマで制作の趣旨・ねらいを伝え，表現における作者の視点，こだわりをおさえて十分に「感じる力」を発揮できるよう表現する時間を設けてみた。２度目の制作では，こだわりをもった制作者の視点やねらいが鑑賞者に伝わり始めた。中にはひものもつ繊細でなめらかな表情や軽やかな動きに着目し，こだわりをもちながら制作を続け，制作時間のほとんどをひもに費やす生徒も現れた。（図５　作品Ａ２）

しかし，ここでも意図する画面構成を形式的にこなしている作品やこだわりの視点が「うまく描く」といった作品が見られる結果となった。技能の高い生徒ほどその傾向が強く表れた。（図５　作品Ｂ２）

これらの制作過程を観察してみると，提示された課題に対してはこれまで身に付けた知識や技能をいかに活用し表現しようと取り組む姿を見取ることはできたが，生徒の内から生まれた疑問や欲求をうまく引き出せていない感じが印象として残った。それは制作者が自ら何を課題としてとらえて，探求に値する価値を見い出すことへのアプローチの仕方（課題発見能力）や，どのように探求するのかという主体的な取り組みの仕方に気づけていないことがあげられる。そこでこれまでの過程を踏まえ，同テーマで再び制作を行った。３度目の制作では生徒がストレスとなるような設定の工夫や制作過程での意欲の継続を図る工夫を大切に行った。その方法は，まず描く画面を黒く鉛筆でシェーディングさせ，あえて描きにくい条件を提示してから表現させるプロセスを加えてみた。結果は作者のねらいをいかに表現するかといった試行錯誤の跡がみられ探求の質が向上したことがうかがわれる。また，制作中の生徒の様子から，実感を伴う表現技術の習得は，生徒の意欲をかき立て，学びの深まりを実感している様子が感じられた。（図６）

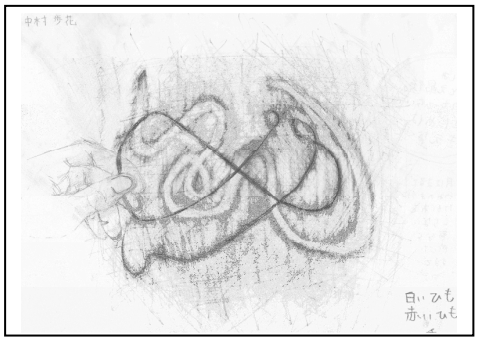


作品Ａ２

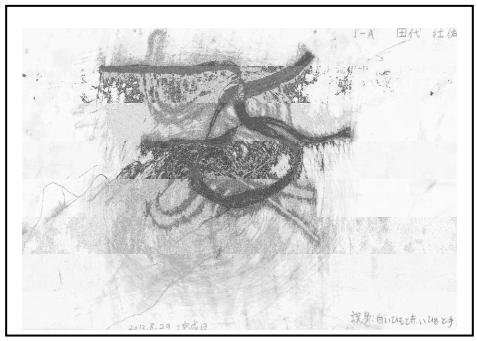


作品Ｂ２

図５　題材の趣旨に気づかせ，生徒のこだわりを大切に制作した２度目の取組



作品Ａ３



作品Ｂ３

図６　試行錯誤の跡や探求の質が向上が見られる作品例

制作を終えた生徒の感想には次のようなものがあった。

●今まで描いたひもの中で最もしなやかで自然な感じのひもに仕上がった。前回の作品では赤いひも白いひもそして手がばらばらな印象でしたが今回描いたものは全体が絵にきれいに溶け込んでいるようで心地よい感じがする。

●回数を重ねる度にひもの質感が出てきた。なめらかで柔らかいひもになっていった。こういったひもを描きたかった。

●これまでの作品と比較して何か違う。「違う」とはうまくいえないがリアルに描けた気がする。

●真っ黒い用紙に消しゴムで描くのは初めての経験だった。初め描きにくいと思ったが周りの黒い部部を消すのが楽しくなり，早く完成させたいと一生懸命描いた。とても芸術的に感じた。

●これまでと違い絵に躍動感のようなものがすごくあったと思う。

●これまでの手やひもに比べ超うまく描けた！満足。

３度の同テーマによる作品の表現活動は，生徒の課題発見能力・問題解決能力を見取るきっかけとなった。作品Ａ，作品Ｂはそれぞれ同一人物の制作の過程である。作品Ａは評価基準においてＢ基準を満たしてきた生徒である。制作を終えて，バランスのよい表現力を表出させる結果となった。また，作品Ｂを制作した生徒はこれまでＡ基準を達成してきたが，作品の質に関するさらに深い探求をし始めた。

Ⅴ　仮説の検証

今年度，研究仮説「習得すべき基礎的・基本的な知識や技能を明確にすることにより，生徒の表現や鑑賞活動において，思考力・判断力・表現力の向上がはかられ，主体的に自らの課題を追究するための力を育てることができる。」について検証する。①習得すべき基礎的･基本的な知識や技能を明確にする取組においては意図的に表現の条件を絞り込むことで生徒に身につけさせたい力を明確にできた。その結果，生徒は与えられた条件の中で表現のための工夫を始め，視点を明確にしながら常に問

図７　作品鑑賞を行う授業風景

題意識を持って表現活動に取り組むことができた。鑑賞での美術的な感受における基礎的・基本的な知識や技能についても同様の結果を感じた。「比較」という視点を意図的に設定した作品鑑賞において，お互いの価値観を交流する場面を取り入れた基礎的な演習等の学習活動の工夫は生徒の思考・判断し，表現する力の活用を促す機会となった。②主体的に自らの課題を追究するための力に関しては，実感を伴う表現技能の演習やねらいが明確に伝わる表現作品の制作を通じて生徒と教師が問題を共有しながら追究のための支援を進めることで興味や関心を持続させ，「できた」という達成感を感じ取らせる指針ができてきた。また，これまで取り組んできたポートフォリオの蓄積において，題材おける必要な基礎的な知識や技能を高める演習は，個々の生徒の問題の追究やどのような思考活動を行ってきたかが具体的な形として可視化された。さらに，学期末に行われる試験など長期にわたる思考の変化や過程の蓄積により生徒一人ひとりが感じる問題意識を共有でき，効果的な指導や評価を行うことができた。これにより課題を発見し，問題解決のための一連のプロセスを体感させることができた。

Ⅵ　成果と課題

本年度は，生徒の探求過程により添い，課題発見能力・問題解決能力といった力の育成を視点として実践を進めた。制限の設定により視点の明確化を図ることは，生徒にも指導者においても効果的な手段の一つであると感じた。そこで共有された課題を解決していくためには，長期的な判定資料を基に，生徒一人ひとりの状況に応じた指導法が求められるだろう。成果としては，次の２点である。①演習課題としての取り組み方の工夫により，より明確な視点を生徒へ与え意識や技術の向上がみられた。②可視化を目的としたワークシートの工夫は，試行錯誤の過程や思考の過程や変化が見取りやすくなり，問題意識を共有することに役立ち効果的な助言やアドバイス，適切な場面での評価が可能になった。また，生徒自身の学習の振り返りや知識・技能の活用に役立った。課題としては，２点あげられる。①知識・技能の習得と感性の部分は総合的に高め合うことが大切で，バランスよく育むことが必要である。教師が「表現」と「演習」という形でしっかりとしたねらいを持って取り組む必要がある。問題解決のためにはその問題とするところを生徒も教師も共有して解決のための支援をしていくこと進めることが必要である。②さまざまな題材に活用できる知識や技能を定着させるための演習ワークシートと，視点を明確にした「思考・判断し，表現する力を可視化するワークシート」を整理し，さらなる工夫改善を加え，生徒自身が主体的に学習活動を進められる工夫が必要である。

Ⅶ　おわりに

美的感覚の９０％は，５歳までに確立されるといわれている。しかし，いつの時代であろうと昨日までと違う自分らしさが表現できたとき，その感覚は高まっていくと考える。学びの深まりを自らが自覚し，自己実現のための創造的な表現力を身につけていくことは，生涯にわたって美術に親しみ，生活や社会に生かしたり豊かにしたりする感性に結びつくものであると考える。今後も継続的な検証を行っていきたい。

（文責　冨尾　拓）

＜参考文献＞

・中学校学習指導用要領解説美術編（平成 20 年 9 月）文部科学省

・評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校美術）（平成 23 年 7 月）国立教育政策研究所教育課程研究センター

・教育研究大会研究紀要(平成 23 年　平成 24 年）北海道教育大学附属教育学部附属函館中学校